

研究主題

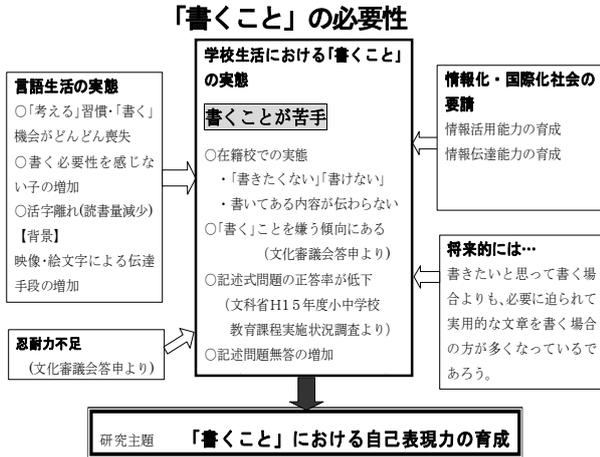
「書くこと」における自己表現力の育成

～付けたい力の系統性を重視した指導～

要約: 「書く力」のある児童を育成するにあたり、単元における付けたい力に着目し、『付けたい力の系統表』『付けたい力をもとにした単元構想表』を作成した。また、指導にあたっては、教師の授業改善が求められることから『授業改善構想図』を作成した。これらの図・表をもとに授業実践を行い考察した。その結果、「書く力」のある児童を育成するには、『付けたい力の系統表』において、系統的・段階的に配された指導内容を螺旋的・反復的に指導していくことが有効であると分かった。同時に授業においては、書く意欲の喚起と書く能力の定着のバランスを図っていくことが重要であることも分かった。

キーワード: 付けたい力の系統表 付けたい力をもとにした単元構想表 授業改善構想図
重点的に付けたい力 書く意欲の喚起と書く能力の定着のバランス

I. 主題設定の理由



II. 研究の目的

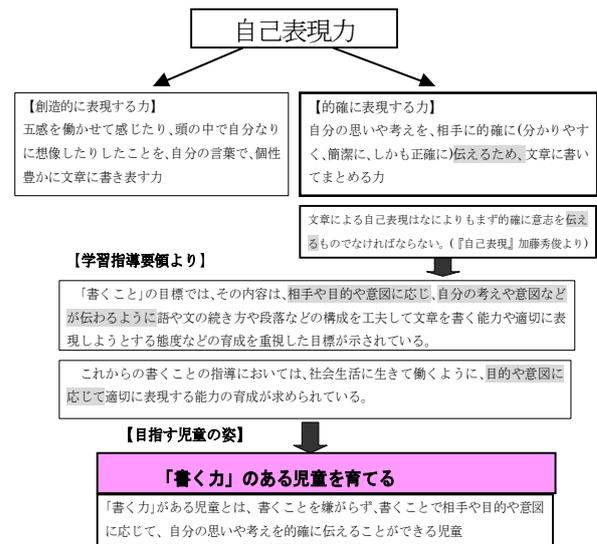
「書く力」のある児童を育成するため、『付けたい力の系統表』を作成し、付けたい力の系統性を重視した指導の在り方について探ることを目的とする。

III. 研究の方法

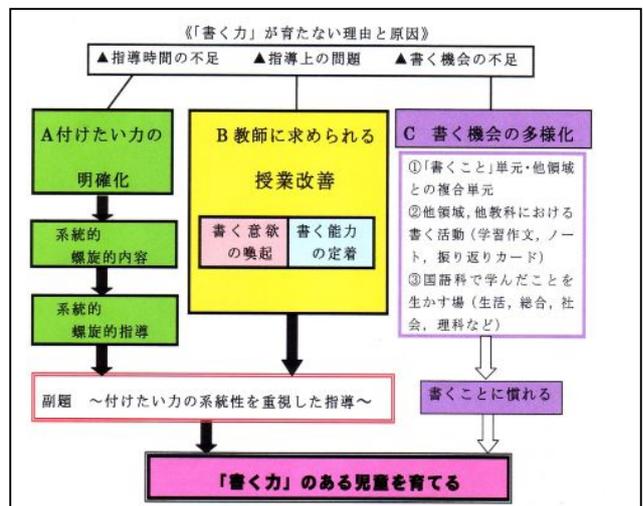
1. 文献・調査等により、現代の児童の「書くこと」における実態及び「書く力」の育たない理由と原因を探る。
2. 「付けたい力」のとらえを明確にし、学習指導要領を拠り所に『付けたい力の系統表』を作成する。さらに、授業に生かすための『付けたい力をもとにした単元構想表』を作成する。
3. 「書く力」のある児童を育成するために教師に求められる授業改善について、その在り方及び手だてを探り、『授業改善構想図』を作成する。
4. 作成した『付けたい力をもとにした単元構想表』『授業改善構想図』をもとに、付けたい力の系統性に着目して授業実践を行い、考察する。

IV. 研究の内容

1. 「自己表現力のとらえ」と「目指す児童の姿」



2. 「書く力」のある児童育成のための基本構想



A. 「付けたい力」の明確化

「書く力」の育たない原因の一つに指導時間の不足が挙げられる。前学習指導要領と比べると全学年 15~20 時間の削減となっている。故に定められた時間の中で「書く力」を付けるには、単元における「付けたい力」を明確にし、確実に力を付けていく必要がある。

- 拠り所は「学習指導要領」の指導内容である。学習指導要領の内容項目を吟味することからすべては始まる。(…①)
- それは一体どのような力なのか、どうなればその力が獲得されたと評価できるのか、きわめて曖昧である。
- その指導内容をそのままの形で単元化し授業することは難しい。
『伝え合い学び合う国語教室』二瓶弘行より抜粋)

- 各学年の目標や内容を的確に押さえ、児童の言語能力の発達段階に即してそれぞれの学年の到達度を設定しなければならないのである。(…②)
- 各学校においては、螺旋的系統の条件にあった国語科で育てる能力表を作成して(…④)カリキュラムを編成する必要がある。(…③)

【基本的能力】…言語活動を通じて獲得される諸能力を明らかにしたもの。価値ある言語活動の中で身につく能力

【基礎的技能】…学習指導要領の言語事項を中心とした技能
『国語学力を測る「到達度」チェックカード 書くこと』
瀬川栄志より抜粋)

※上記の【基本的能力】を「付けたい力」、【基礎的技能】を「基礎的言語事項」ととらえ、以後の研究を進めていくことにする。

(網がけ・番号は筆者。番号は下の枠内の番号と対応している)

①~④の順に、学習指導要領に示される目標・内容との関連から、低中高学年で児童に身に付けさせたい能力をそれぞれ明確にし、その系統性を重視して単元に位置付ける。③で「重点的に付けたい力」を明確にした上で、確実に力が付くように重点を絞った指導を行う。

- ① 「学習指導要領」の指導内容の吟味
- ② 『付けたい力分類表』の作成
- ③ 『付けたい力をもとにした単元構想表』の作成
- ④ 『付けたい力の系統表』の作成

B. 教師に求められる授業改善

「書く力」の育たない原因の二つ目に、教師の指導の問題が挙げられる。従来からの作品主義等の指導を改め、授業改善を図る必要が教師に求められているといえる。そこで文献等をもとにして、教師に求められる授業改

善について、その在り方及び手だてを探り、自分なりに下記の『授業改善構想図』にまとめた。ここでは特に、**書く意欲の喚起**と**書く能力の定着**のバランスを図った授業が求められる。

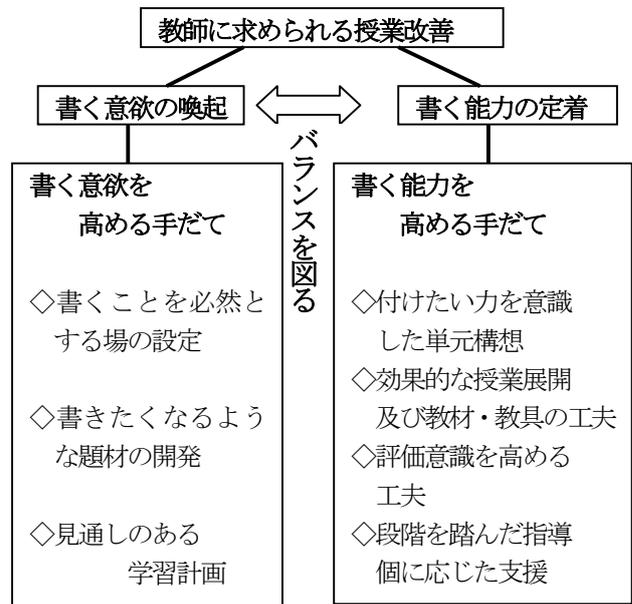


図1 授業改善構想図

C. 書く機会の多様化

「書く力」の育たない原因の三つ目に、書く機会の不足が挙げられる。日常の言語生活においても書く機会がどんどん減少し、書く必要性を感じない子が増えている。「書く力」を付けるには、いろいろな機会をとらえて、様々に書くことが必要である。とにかく書くことに慣れていくことが大事である。

以上A・B・Cのうち、本研究ではA・Bに焦点を当て、「付けたい力の系統性を重視した指導」を副題として研究を進めることにする。

3. 授業実践の結果と考察

『付けたい力をもとにした単元構想表』と『授業改善構想図』をもとに授業実践を行い、『授業改善構想図』の中の7つの手だて(◇)を視点として考察する。

(1) 実践授業I

3年「知らせよう！能美小白慢の昔の道具 ～分かりやすく書こう～」

【書く意欲を高める手だて】

場の設定…能美小にある昔の道具について、他校の4年生に紹介文を書くという交流の場を設定した。手紙での依頼が書く意欲を高め、返信が届いたことで次回書くことへの意欲にもつながった。

題材…日頃あまり目にしない古い道具だったことが、子ども達の興味・関心を惹き、意欲的に書く活動に取り組むことができた。

学習計画…長時間単元の学習は途中で飽きて嫌になりがちだが、ゴールを明確にし、毎時間本時のめあてや進捗を確認したことで、意欲を持続させながら、最後まで取り組むことができた。

【書く能力を高める手だて】

単元構想…『付けたい力をもとにした単元構想表』に基づき、重点的に付けたい力を「事柄ごとに段落を分ける力」（構成）ととらえ指導した。結果はほぼ全員が段落を分けて書くことができた。

取材については、取材の仕方を初めて学ぶ単元であったことや、取材量が膨らまず段落の構成がとらえにくかった点からすると、取材も重点的に付けたい力として指導すべきであった。

授業の工夫…モデル文の提示や、事柄ごとのまとまりを意識させるための色別カード・新幹線作文号など、視覚に訴える工夫が段落を意識させる上で効果的であった。

評価意識…1字下げにシールを貼る、まとまりごとに色で囲むなど、重点的に付けたい力を意識し観点を絞った自己評価は、子ども達にも分かりやすく、文章をよりよいものにするという評価意識にもつなげることができた。

段階を踏んだ指導…取材～評価まで段階を踏んで文章を書くのは初めてだった。「飽きると思ったけど少しずつやると楽で飽きなかった。」「書く材料を集めて書くときすぐ書いて楽だった。」など、段階を踏んで書いたことで書きやすく、「書けた」「また書きたい」という満足感を得た子が多かった。

《課題》

- ★重点的に付けたい力の一つに絞る方がより確実に指導が行えるかと思っただ、取材についても重点的に指導した方がより書く力がついたように思う。『付けたい力をもとにした単元構想表』を柔軟にとらえ、検討・改良を加えていく必要がある。
- ★推敲時の相互評価において、友達のアドバイスを受けて書き直した子は少なかった。今後は、相互評価を繰り返す中で、自分の文章をより良くしようという意識を高める必要がある。
- ★個に応じた支援については取り入れなかったが、書くことが得意な子、苦手な子、それぞれが伸びる支援の在り方について考える必要がある。

この3つの課題を次の授業実践Ⅱに生かして、取り組むことにした。

(2) 実践授業Ⅱ

3年「これを読めば君もバッチリ！『うさぎのお世話説明書』を作ろう～まとまりに分けて書こう～」

【書く意欲を高める手だて】

場の設定…うさぎの世話の仕方を2年生に引き継ぐため、説明書に書いて教えるという場を設定。「書いたものが実際に役に立つ」という、書く必然性が子ども達の書く意欲を高めることにつながった。また、書き進むにつれ「きちんと書かなければならない」という責任感と、「私たちこそが次の学年に伝えていくのだ」という使命感も湧き、さらに書く意欲が高まっていった。

題材…体験に基づいた題材で書いたことは、取材活動が容易で取材量も豊富になったため、どの子も意欲的に書き進めることができた。また、「みんながこの学校の中で誰よりも詳しく知っているんだよ。」といった声かけにより、ますます書く意欲が高まった。

学習計画…実践授業Ⅰでとても有効だったので、同じ形式を利用した。実践Ⅰが生きていて「今日は～するんだよね。」と子ども達の方から意欲的な声も上がった。

【書く能力を高める手だて】

単元構想…『付けたい力をもとにした単元構想表』に基づき、重点的に付けたい力を「読み手や書く目的を具体的に意識して書く」（相手・目的意識）と「事柄ごとのまとまりを意識して区切りを考える」（構成）の2つととらえ指導した。また実践授業Ⅰを受け「付けたい力の系統性」を念頭に置いて、単元全体を構想した。

結果は、ほぼ全員が、読み手を具体的に意識して書くことができ、また、事柄ごとにまとまりに分けて書くことができた。

授業の工夫…相手・目的意識の図式化といった視覚に訴える工夫や「スーパー士だんご」の説明書による書き方のモデル学習など、重点的に付けたい力を中心に授業展開や教材・教具を工夫したことで学習の効果が上がり、書く能力を高めることにつながった。

評価意識…説明書の推敲時と完成時に2回、積極的に相互評価を取り入れた授業を行った。推敲時の《付けたい力を意識した相互評価》はやや難しかったようだが、完成時の《良さを認め合う相互評価》では、自分の説明書と比べて読み、友達から学ぶことも多くあったようである。また、「うまく書けた」という充実感や達成感が次の書く意欲へもつながっていったようである。

段階を踏んだ指導…段階を踏んだ指導は2回目ということで、単元全体の流れを把握しやすく、学習活動も抵抗なく行えた。また、実践授業Ⅰで学んだことを螺旋的・反復的に取り入れ、子どもの実態に応じて指導を加えたことで、書く能力の定着によりつながったといえる。

個に応じた支援

実践授業Ⅱは、Ⅰに比べて指導内容が多く、子ども達の学習負担も大きいと考え、個に応じた支援を取り入れる必要を感じ、実践した。

以下にその具体的な支援と効果について述べる。

支援	書く用紙を何種類かある中から選択させる。
効果	書くことが得意な子は長い文章を書けるもの、苦手な子は書く量が少なくても済むものを選んでいことから、個に応じることのできる得意な子、苦手な子それぞれに書く意欲を満たすことができたと思える。
支援	全員必須の事柄に、書きたい事柄を追加させる。
効果	書くことが得意な子に加え、苦手な子も6人中3人が追加し、全体では19人にも上った。教師は事柄を増やせば書くことの負担につながると考えたが、子ども達は、書くことの負担よりも2年生に教えてあげたいという意欲の方が大きかったことが分かる。個々の伝えたい思いを満たすことができたと思える。
支援	キーワード、写真などを取り入れさせる。
効果	発展的に取り入れて書きたい子が自由に選択できるようにしたところ、主に書くことが得意な子の意欲を喚起し、書く能力をさらに高める作用として効果があったと思える。

個に応じた支援とは、従来は書くことが苦手な子の学習負担を軽くするための配慮であると考えていたが、個々にいろいろな選択ができるような場を設定し個を伸ばすこともまた、個に応じた支援であると思える。

《課題》

- ★推敲段階の「付けたい力」が、子どもの実態にやや合っていないかった。授業を行う際には、子どもの実態を十分に考慮した上で、『付けたい力の系統表』を柔軟にとらえ、効果的な指導の工夫をすることが必要である。
- ★授業実践Ⅰで学んだことの意識が薄れ、授業の中で土台として生かせない子もいた。学習に使った資料などを常時掲示したり、学習したことを繰り返し再確認する場を設けるなどの、教師の手だてが必要である。

V. 研究のまとめ

1. 実践授業Ⅰ・Ⅱを通してのまとめ

- ☆授業実践Ⅰとの系統性を重視しながら、単元における「付けたい力を意識した単元構想」のもと授業実践を行ったことで、前回付けた力を土台に今回新たな力を身に付けることができた。
- ☆『授業改善構想図』の7つの手だてを意識して授業実践を行った結果、子ども達に「書く力」を付ける上では、どの手だても有効であることが分かった。また書く意欲の喚起と書く能力の定着とのバランスを図ったことが、「書く力」の向上につながったといえる。
- ☆「書く活動においては題材が大事である」とこれまで言われてきたが、2度の授業実践を通じ、題材選びには十分な吟味が必要であることを痛感した。書く意欲を喚起し継続させるためには、「書きたくなるような題材」を選ぶことが大事だが、同時に「付けたい力が身につく題材か」という視点も必ず必要である。

2. 『授業改善構想図』の新しいとらえ

授業実践Ⅰ・Ⅱを『授業改善構想図』の中の7つの手だて(◇)を視点として考察する中、「書く能力を高める手だて」の4つの視点をもう一度自分なりにとらえ直してみたところ、4つの視点と授業との関係を、以下の図のようにとらえることができた。

このように今後は、確実に身に付けるべき力と個によって伸ばすべき力を意識して、授業に臨まなければならないと思える。

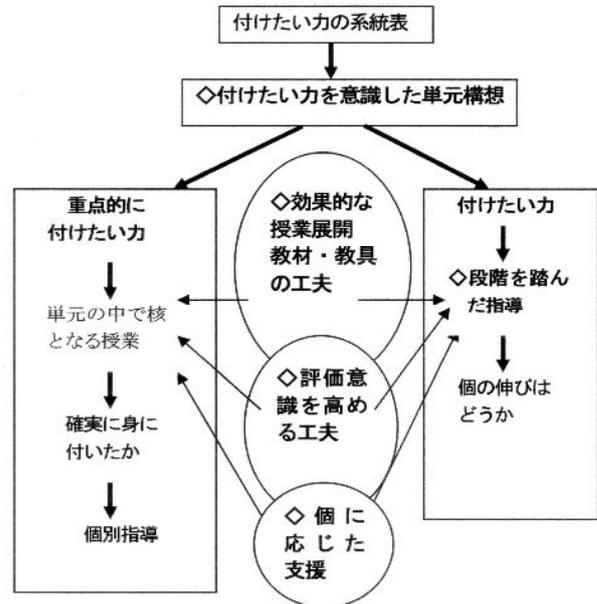


図2 4つの視点のとらえ

3. 授業実践を通して確信したこと

単に「この単元があるから授業する」のではなく、「こんな書く力を付けさせたいから、この言語活動で授業する」と考えて授業を構想することが大切である。つまり、「どんな書く力を付けるのか」という考え方が大事なのである。

価値ある言語活動の中で適切な題材で書くことを通して、「付けたい力」を身に付ける学習を、「系統性を重視」し「繰り返し」学習していけば、「書く力」のある児童を育成することができるということはこの授業実践を通して、確信することができた。

VI. 結論

○低・中・高学年において「書く力」のある児童を育成するには、『付けたい力の系統表』において、系統的・段階的に配された指導内容を、螺旋的・反復的に指導していくことが必要である。ただし、教師は児童の実態を考慮し、『付けたい力の系統表』を柔軟にとらえ、個に応じた支援をすることが大切である。

○指導にあたっては、従来の作品主義等の指導を改め、授業改善を図る必要が教師に求められる。その際、『授業改善構想図』に基づき、書く意欲の喚起と書く能力の定着のバランスを図ることが重要である。

